

個人の背景に着目した 都市のイメージの捉え方

尾野 薫¹

¹正会員 博士（工） 徳島大学大学院理工学研究部（〒770-8055 徳島県徳島市南常三島町2-1,
E-mail:kaoru_o@ce.tokushima-u.ac.jp)

本論は、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方について一示唆を得ることを目指す。出身地、日本滞在歴、専攻の異なる留学生5名を対象に徳島大学周辺のまちあるきを行いながら特異点探索を行い、結果として得られた特異点と、留学生の個人の背景となる出身地のお気に入りの場所について、それぞれの選考理由や空間的特徴とともに都市のイメージの特徴について考察した。その結果、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方として、留学生には、個人の背景における対比、理想、日常生活との関連という3つの視点を抽出した。

キーワード: 都市のイメージ、個人の背景、特異点探索、留学生

1. はじめに

(1) 背景・目的

Lynchは、環境のイメージについて、Identity, Structure, Meaningの3つの成分に分析されるとした¹⁾。このうち、Meaningについて、「都市についての個人的な意味は、その形態がわかりやすい場合でさえ非常にばらばらなので、少なくとも分析の初期の段階では、意味を形態から切り離してもよいだろうと思われる」と述べている。そのため、都市におけるMeaning、すなわち個人の背景に着目した都市のイメージに関する研究は、管見の限りあまりない。一方で、近年、景観計画やまちづくりといった何らかの活動を地域で実行する際には、その地域の住民とともに考え、つくっていくことが求められるようになってきた。この時、非常にばらばらな背景をもつ人たちと合意形成しなければならない。Lynchが述べるように分析の初期段階から個人のMeaningを形態から切り離して分析し、計画を立て、実行しようとした時、場合によっては地域住民の合意が得られず、何もできない、ということにもなりかねない。もし、分析の初期段階から個人の背景に着目して都市のイメージを捉えることができるならば、地域で何らかの活動を実行する時の一助となるのではないだろうか。そのためには、まず、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方とは何かを明らかにする必要がある、更に都市の読み解きにMeaningがどのように関係しているのか、論じていく必要があると考える。

以上より、本論では、個人の背景に着目した都市のイ

メージの捉え方について一示唆を得ることを目指す。

2. 留学生による特異点探索

(1) 調査手法の選定

本論は、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方について一示唆を得ることを目指す。都市の読み解きについては、Lynchによるイメージマップ²⁾やワークショップによる意見抽出など、様々な手法が構築されているが、本論では小林による特異点探索を調査手法に選定した。特異点とは「構造物（対象物）が最も美しく見える場所」のことで、特異点探索はその視点場を探す調査手法で³⁾、小中学生に対する総合学習⁴⁾や、橋梁景観の評価と設計⁵⁾などに応用されている。特異点は個人による探索からグループによる探索へと展開することで見つかることとされていることから⁶⁾、個人による特異点探索によって得られた特異点は、個人の背景とともに考察することが可能であると考えた。

今回の調査では、留学生を調査対象者として選定した。これは、多様な個人の背景について考察できると考えたためである。調査は2017年8月4日に徳島大学にて開催されたサマースクールにて開講した『Regional Planning with Nature : How you understand the Landscape?』として実施した。受講生は5名で、サマースクール参加者以外にもダブルディグリーの学生も受講している。各学生の出身地、日本滞在歴、専攻を表-1に示す。

調査は、まず大学周辺の写真を撮影しながらまちある

きを実施した。撮影した写真から最大10枚を選定し、まちあるきしたエリアのマップを描いて提示しながら説明・共有をした。そして、選定した写真のうち最もいいと思った写真、伝えたい写真を1枚選び、それを特異点として選定理由と共に説明してもらった。調査結果例を図-1示す。この調査結果について、本論ではマップ及び特異点以外の選定写真は分析対象とはしないが、更なる比較のためには今後分析を行う必要がある。

(2) 留学生による特異点探索

図-2に、留学生による特異点探索の結果を示す。これらの写真について、何故特異点として選定したのか、選定理由のキーワードを抽出した(表-2)。その結果、滞在歴が最も短い学生Aは、図-2-Aのように古い建物や樹木のように、時間経過の長さを感じさせるものに特異点を見出していた。一方で、滞在歴が長い学生B・C・Dは、自分自身の大学生活の中で毎日見ている場所を特異点と

表-1 受講生一覧

学生	出身	滞在歴	専攻
A	China	11 days	Toxiology
B	China	4 months	Civil Engineering
C	Taiwan	10 months	Civil Engineering
D	Sudan	10 months	Civil Engineering
E	Nigeria	10 months	Chemical Engineering



図-1 学生Aによる調査結果

表-2 特異点と選定理由

学生	特異点	選定理由
A	住宅 (大学付近)	古い建物・樹木・新しい建物の混在 カーブミラーがターニングポイントを示しているように感じる
B	大学図書館	毎日来ている
C	助任川(大学沿)	毎日見ている(通学路)
D	助任川(大学沿)	毎日見ている(通学路)
E	駐車場	自然と人工物のコントラスト・共存



2-A



2-B



2-C



2-D



2-E

図-2 特異点探索結果

して選定していた。人物Eは、駐車場にある既存樹木を活かしている点に着目し、「コントラスト」「共存」というキーワードを使用していた。以上の結果をふまえ、次章では、学生の出身地のお気に入りの場所について追加調査を行い、比較をすることで、個人の背景に茶刻した都市のイメージの捉え方について考察する。

3. 個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方

(1) 追加調査

前章にて、大学周辺における特異点探索を留学生を対象に実施し、その結果を整理した。この結果に加え、本章では学生の出身地周辺のお気に入りの場所について追加調査・比較を行うことで、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方について考察する。

追加調査には、特異点探索結果の共有時に質疑応答したものと、各自の出身地周辺についてお気に入りの場所の写真と説明文を使用する。なお、学生Dからは共有時の質疑応答が、学生A・Cからは出身地周辺のお気に入りの場所について結果が得られたため、3名分について分析、考察を行った。

(2) 個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方

学生Dによる調査結果を図-3に示す。図-3より、写真の多くが自然物と人工物が撮影されており、その理由について「improve our environment with concrete and greens」と説明していた。学生Dはナイジェリアの出身で、自国のことを「人工的な都市と砂漠が広がっている」と紹介していた。このことから、人工物と砂漠に囲まれた個人の背景が、自然、特に樹木等の緑が砂漠との対比によって都市のイメージとして見出されたのではないかと考えられる。

学生A・Cの出身地周辺のお気に入りの場所を、図-4に示す。学生Aは都市部の出身であり、図-4-Aのように中心部近くに位置する水辺と緑地を選定していた。この学生Aが大学周辺で選定した特異点は図-2-Aのように古い建物と自然と新しい建物が混在している地点である。質疑応答の際には、「中国では古くからあるものを壊し、新しい建物をつくっているが、本当にそれでいいのか?という疑問がある」といった趣旨の発言をしていた。都市部で生活し、そういった疑問をもつようになった個人の背景が、都市の理想イメージのようなものとして特異点に現れていると考えることもできる。また、人物Cは出身地の好きな場所を2箇所あげているが、いずれも「家族でいつも楽しんでいる場所」や「家族と一緒に出



図-3 学生Dによる調査結果



4-A



4-C

図-4 学生A・Cによる出身地のお気に入りの場所

かけていく場所」という理由で選定していた。同様に、特異点の選定理由も「毎日通っている通学路で好きだから」というものであった。このことから、学生Cは日常生活に深く関係している地点を大好きな場所や特異点として選ぶ傾向にあり、都市のイメージと個人の日常生活を関連づけて捉える傾向にあると考えられる。

以上より、留学生は、個人の背景における対比、理想、日常生活との関連という3つの視点によって、都市のイメージを捉えていることを明らかにした。都市において「Meaningは物理的操作に左右されることはない」とLynchは述べたが⁷⁾、個人の背景との対比によって都市のイメージを捉えるということは、物理的操作によって生じた結果との対比と考えることもできる。また、日常生活との関連によって都市のイメージを捉える傾向にある人では、生活している空間が物理的操作によって変化した場合、その物理的操作は日常生活との関連に影響を与える可能性が高い。もし、景観計画やまちづくりで実行した物理的操作が日常生活との関連に影響を与えるものであるならば、都市の分析の初期段階から個人の背景となるMeaningについて理解しておく必要があるのではないだろうか。

4. おわりに

(1) 結論

本論は、個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方について一示唆を得ることを目指し、留学生による特異点探索を分析対象として調査・分析を行った。以下に、結果を示す。

- ・留学生による特異点探索では、時間経過の長さを感じさせるもの、大学生活の中で毎日見ている場所が特異点として抽出された。また、「コントラスト」「共存」というキーワードも特異点として抽出された。

- ・個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方として、留学生は、個人の背景における対比、理想、日常生活との関連という3つの視点が抽出された。

- ・景観計画やまちづくりで実行した物理的操作が日常生活との関連に影響を与えるものであるならば、都市の分析の初期段階から個人の背景となるMeaningについて理解しておく必要があることを指摘した。

(2) 今後の展望

今回の調査では、留学生5名と対象者が少なかったため、得られた個人の背景に着目した都市のイメージの捉え方の3つの視点に対する検証までは行っていない。今後は、留学生に限らず日本人学生も含めて調査すること

で、更に都市の読み解きにMeaningがどのように関係しているのか、論じていく必要があると考える。また、今回の分析には使用していないその他の写真の選好特性やメンタルマップとの関係について更に分析することで、個人の背景と都市のイメージの捉え方についてより詳細に分析することも可能ではないかと考えている。

参考文献

- 1) Kevin Lynch：都市のイメージ 新装版, pp. 10-11, 岩波書店, 1960.
- 2) 前掲1)
- 3) 小林一郎：風景の中の橋, 槇書房, 1998.
- 4) 小林一郎, 星野裕司：特異点探索 -フィールドワークとしての土木史・景観教育-, 土木史研究第21号, pp. 241-246, 2001.
- 5) 山下真樹, 小林一郎, 増田剛士, 橋本淳也：橋梁景観の評価と設計への特異点概念の利用, 構造工学論文集 Vol. 45A, pp. 615-622, 1999.
- 6) 小林一郎ほか：風景のとらえ方・つくり方, p. 7, 共立出版, 2008.
- 7) 前掲1)